

石川勇一著

## 『心理療法とスピリチュアリティ』

(勁草書房 2011)

村川 治彦 関西大学\*



トランスパーソナル心理学の領域では、1970年代からFrancis Vaughanら心理臨床家たちによって、スピリチュアリティを視野にいたした心理療法のあり方について様々な議論が行われてきた。しかし一般の臨床家にスピリチュアリティという概念が広く受け入れられるようになったのは、1994年に改訂出版されたDSM-IVにreligious or spiritual problemという項目が加えられてからである。一方日本では、1998年にWHOの執行理事会で健康の定義の改正案の議論がなされたことが、スピリチュアリティに注目が集まる大きなきっかけとなった。

しかし同じ頃から、宗教者によるスピリチュアルカウンセリングなどがマスコミで大きく取り上げられるようになったために、専門の心理臨床家はスピリチュアリティを重要だが怪しい領域と見なし、それをきちんと扱うことを避けてきた。そのためターミナルケア以外の専門的な心理臨床の領域でスピリチュアリティを正面から論じた書物はこれまでなく、この『心理療法とスピリチュアリティ』がおそらく初めてではないだろうか。

しかし、この本の重要性は何も専門の心理臨床家がスピリチュアリティを初めて扱ったとい

う点にあるのではない。何よりもこの本において著者が、心理療法においてスピリチュアリティを扱うあり方が、whatではなくhowであるという今後日本でこの問題を論じる際の基本的な方向性を初めて示したという点にこそある。

外来語であるスピリチュアリティを定義したり日本語に翻訳することが極めて困難であることは、西平や島藺、榎尾らスピリチュアリティに関わる現象を研究している宗教学者たちも指摘している。このやっかいなスピリチュアリティを研究するうえで、心理臨床家として著者はまず次のような基本的な姿勢を打ち出した。

「スピリチュアリティという用語がこれほどまでに普及しつつあるのは、学問的な要請というよりは、それを体験した者の情熱にある。すなわち、私たちの狭小な自我をはるかに越えて働く大いなるものを直接的に体験し、それを言語によって近似的にでも表現する必要性を強く感じる人々の数が、各領域で増加していることがこの用語がこれほどまでに普及している中心的な原動力であると思われる。このような経緯をふまえるならば、スピリチュアリティの本質を理解するためには、言語的な定義に必要以上に拘泥することなく、つねに概念化以前の、直接体験がいかなるものであったかを見通そうとする姿勢が不可欠なのである。」(p.239)

\* Email: murakawa@kansai-u.ac.jp

そして、この基本姿勢のもとで著者は、心理療法について二つの命題を確認する。まず一つ目は、「心理療法は現象学的でなければならない」という命題である。この命題を著者は、「心理療法においても、もちろん客観的な理解は重要であるが、それだけでは事足りない。より重要なのは、内的な真実へ到達することである。内的な真実とは、そこに主体的に関わるもののみが感受するものであるから、客観性は成り立たない。（中略）しかしながら、現象学的態度を心がけつつ、今ここで起こっていること、そして起こりつつある未分化な前概念的な有機的過程もみることによって、次第に姿を浮かびあがらせてくるものである。この作業は公共的な客観性ではなく、個人と個人の間での間主観的な真実を求めて模索していくのである」（p.4-5）という臨床家の態度として展開する。

そして現象学的に「すべての理論を手放し、今ここで起きていることに全神経を傾注」しながら心理臨床家として「クライアントに真摯に寄り添う」態度で、「たとえば不意にやってくる印象、イメージ、着想、直感、身体感覚、意味ある偶然の出来事、曰く言い難い感覚として捉えられる『雰囲気』など」を手がかりに「非個人的なにか（Something Impersonal）」を探っていく。それが、心理臨床家としてスピリチュアリティに向き合う基本的な態度であると著者はいう。

この現象学的な態度の必然的な帰結として心理臨床家は「アクチュアルなスピリチュアリティを感じ取るようになり、その働きに導かれて変容が起きていることに気づかされるだろう」（p.293-294）と著者はいう。これが、現象学的態度に続く第二の命題として筆者が掲げる「心理療法はスピリット・センタード・セラピーであるべきである」という命題である。

先の現象学的態度によって捉えられる「雰囲気」は、神田橋條治の言う「精神療法群に共通

する核」であり、「形がなく、輪郭がなく、言語によって捕まえることができず、イメージの基盤に流れている『それ』」であり、「心理療法家の仕事とは、『それ』の下請けに過ぎない」と著者は言う。そして、「スピリチュアリティがクライアントを導く隠されたライトモチーフとして、つねにその都度実際に生きて働くものであるということを念頭においておく」（p.23）これが著者の言う「スピリット・センタード・セラピー」であり、心理療法においてスピリチュアリティに向き合うもう一つの基本的態度である。

この二つの命題とそれに導かれる基本的態度こそ、心理療法においてスピリチュアリティを扱う際のhowであり、心理臨床家がこのhowを守ることでそれぞれのクライアントの生きた経験に様々にたち現れるwhatを捉えることができる。それこそが本書で著者が提示した心理療法におけるスピリチュアリティを扱う方向性であり、今後どのような議論が展開されるにしろその土台となるだろう。

本書の構成について少し述べておく。序論においてそれぞれの概要が示されているが、全体は第一章「心理療法と現象学」第二章「トランスパーソナルな発達と心理療法」第三章「否定的感情とどう向き合うか」第四章「『前世療法』の臨床心理学的検証」第五章「エネルギーセラピーの可能性」第六章「瞑想による心理的効果」第七章「日本の心理療法とスピリチュアリティ」第八章「心理療法実践とスピリチュアリティ」第九章「心理療法とスピリチュアリティの行方」の九つの章からなっている。特に事例を用いながら「心理療法は現象学的でなければならない」という基本的な命題を提示している第一章、それに基づき心理療法の現場においてどのようにスピリチュアリティを扱うべきかを論じた第七章、第八章、そして「クライアントが自らのスピリットに触れられるよう援助す

る」スピリット・センタード・セラピーを提唱している第九章、前世療法についてのバランスのとれた議論を展開している第四章は秀逸である。

本書の内容で一つだけ気になったことがある。それは、第五章のTF Tを論じるに際して治療効果の高さがいささか強調されすぎており、前世療法についての問題と可能性を論じた第四章で見せたバランスのとれた切れ味鋭い分析が見られないことである。TF Tのようなエネルギーセラピーが心理療法の世界ではまだほとんど知られていないために、その紹介が主となっているのは仕方がないが、それだけにこうした技法が臨床の場で応用される際に浮かび上がる問題点についても第四章で行ったような深みのある議論をしていくことは必要であろう。この点は、今後の論考に期待したい。

最後になるが、かつてトランスパーソナル心

理療法の第一人者Francis Vaughanは、トランスパーソナル心理療法の定義をコンテンツではなくコンテキストであると述べた。その意味でこの本は1970年代からのトランスパーソナル心理療法の王道を受け継ぎながら、日本における独自のトランスパーソナル心理療法を展開していく土台を作ってくれたといえる。今後著者が掲げるスピリット・センタード・セラピーは、心理療法の基本的なあり方としてだけでなく、日本文化におけるアクチュアルなスピリチュアリティの研究、たとえば仏教や神道などの伝統的宗教が、日本人の中でどのようにアクチュアルに働いているかを考えていくための重要な事例を提供してくれるだろう。スピリチュアリティを扱う心理臨床家にとっても、また日本的なスピリチュアリティのあり方を研究する者にとっても基本的必読書として薦めたい。